

## 創立40年史の編集

浜本弘

Editing of the 40th Anniversary

Hiroshi Hamamoto

## 1. いきさつ

株式会社豊田中央研究所は1960年11月9日に設立され、1980年に名古屋市天白区から長久手町の現在地へ移転した。1990年の創立30周年には「豊田中央研究所30年の歩み」が発行された。

その後10年が経過し、技術立国として、また経済発展の起爆剤として、独創的研究に基づく新産業の創設が強く要請される時代となった。その間にも技術開発は急速に進み、当社の研究開発も進展して、その保存、整理が今後のために必要となった。さらに、トヨタグループでは10年ごとに社史を発行する傾向がある。

そこで、1996年5月に情報特許部より40年史発行(案)、1997年8月に知的財産部(旧情報特許部)から40年史編集スケジュール(案)が水曜会に提案され、承認された。その企画を受けて、1997年8月に中研40年史準備ワーキンググループ(WG)が発足した。WGには、知的財産部担当の団野敦取締役をリーダーとして、昔のことをよく知っていると思われたベテラン6人が集められた。事務局として、知的財産部の岡田茜部長、木村雅人技師がWGに加わり、どのような年史を作るかについての基本構想がまとめられた。

1998年4月にWGのリーダーを委員長とし、メンバーを委員とする中研40年史発行の編集委員会が発足した。事務局に大森圭子副主事が加わった。編集委員会の推進責任者には、当時の上垣外修己所長が就任された。毎月2回の編集会議(WG時代から通算70回以上)



写真1 編集委員の皆さん

を開いて年史の作成を進めてきている。

## 2. 社史の基本構想

当社における年史発行の目的は、第1にトヨタ自動車を初めとするトヨタグループの株主会社に対し、研究成果および技術開発をもって存在意義をPRすることである。次に、社員やその家族に当社の活動内容をよく理解してもらい、さらなる躍進の助けとする。第3には、社会へ情報公開して当社の主体性確立に益することや、資料を保存整理して、今後の経営や新入社員の教育に役立てること等。

これらをまとめて今回の年史発行の目的は、「当社の軌跡を研究と創造を中心に正確に整理し、トヨタグループおよび社会にPRするとともに、当社の今後の飛躍への一助とする」となった。

一般に、社史の構成はほぼ定型化しているが、記載する内容は人間の営みであるから、その会社に特有なものとなる。この年史では、現在(最近の10年)、未来(10年後)、過去の順で構成し、技術紹介をページ単位で完結させて利用しやすく、また、写真や図表を多くして見やすくする等の方針で、編集が進められた。

タイトルは「究める、創る」、「想像性豊かに」等多くの候補から、内容を表すものとして「研究と創造」に決まった。

第1章では最近の10年間を取上げ、(1)経営や運営に関する諸施策、(2)研究活動における主要技術の流れ、(3)社会との交流を記述する。

第2章には読みやすい将来展望を記載し、(1)豊田英二最高顧問の講演会内容「創造」、(2)わたしの未来、夢(オピニオン懸賞募集の入選作品)で構成する。

第3章では、「豊田中央研究所30年の歩み」を5期に分けて要約する。

第4章は資料編。

総ページ数は約260ページ、全ページカラー印刷とし、2001年4月1日発行予定である。

## 3. 編集活動

資料収集・整理、記載技術の選定、原稿作成等が主な活動内容である。

経営と運営については、所長の年頭挨拶、中長期計

画、部長会報告、総通・通達、水曜会資料等から主な施策事項を選んだ。当社は研究開発を業としているが、当然社会変化の影響を受ける。最近10年間の会社方針は、それまでのニーズ対応を主とする方向から、当社独自技術の開発を効率よく遂行する方向へ、大きく舵が切られた時代である。

方針等の変化については断片的にしか把握していなかったもので、その流れの理解が不足していると感じているが、諸施策の展開を忠実に記載したつもりである。21世紀に向けて、一人ひとりが独創性を発揮して、当社の技術基盤がさらに強化されるように改善・改革が進められてきたと感じている。

研究活動の調査は、第1回からの研究発表講演会前刷り、年間成果報告書、所内外表彰技術等に記載されている約15000件に及ぶ研究テーマを、65項目の技術名に分類するデータベース(DB)づくりから始まった。この整理作業の進捗にはOA化が大変有効であった。このDBから年史に記載する技術を選定した。

まず、「中核技術」候補を選び、関係者にそれを構成する要素技術のレベルに関するアンケート調査をして、10項目を選定した。

次に、現在進展中であり、今後中核技術として期待されるもの6項目を、「これからの中核技術」とした。

さらに、過去には中核技術に相当して現在も技術の輝きがあるもの、あるいは当社独自の技術として評価の高いもの36項目を、「特徴ある技術」とした。

これらの作業中に、当社のトップより研究成果の歴史を玄関に表示するようにとの指示が編集委員会に出され、DBを使って原案を作成した。社内での審議を経て、1998年6月、エントランスホールの壁に「研究

の沿革」を掲げ、受賞した主な賞牌も展示した。

展示を見て、主な技術開発の流れは分かってもらえると思う。しかし、単純化して見やすくしたことやパネルサイズの制限のために、多くの研究成果を割愛したこと、今後継続して記載する場所を十分確保しなかったこと、等に課題があったと反省している。

その後、中核技術という名称が当社の中長期計画(1999年12月策定)に用いられた。年史では過去から現在における技術を主に記載するが、現在から将来の技術をめざす中長期計画と同名では誤解されやすい。そのため、中核技術を「代表的な技術I」、これからの中核技術を「代表的な技術II」へと変更した。

これらの技術内容については関係の深い人達に原稿作成をお願いし、各担当の編集委員がチェックした。それぞれの技術の過去から現在まで、さらに今後の展望まで記載されている。これがこの年史の特徴の一つである。

現在(10月)原稿はほぼ集まり、印刷会社でリライト中である。ビジュアルな年史をめざしたが、適切な写真が不足し文章が多くなったきらいがある。

2000年10月1日までに当社に在籍した人は、1916人に達する。創立時代の約12年間と移転(1980年)前後10年間、拡充(1990年)前後5年間の3期に入社した社員が多い(図1)。この年史にはできるだけ多くの人の活動を記載するように努めた。活躍の中心が若返っていることを期待している。

40年を人に例えると不惑の歳。惑わないように常日頃から精進することも大切であるが、仕事の上で迷ったときには、この年史に記載されている軌跡を参考に、新たな道筋を見つけて進んでほしい。

(2000年10月11日原稿受付)

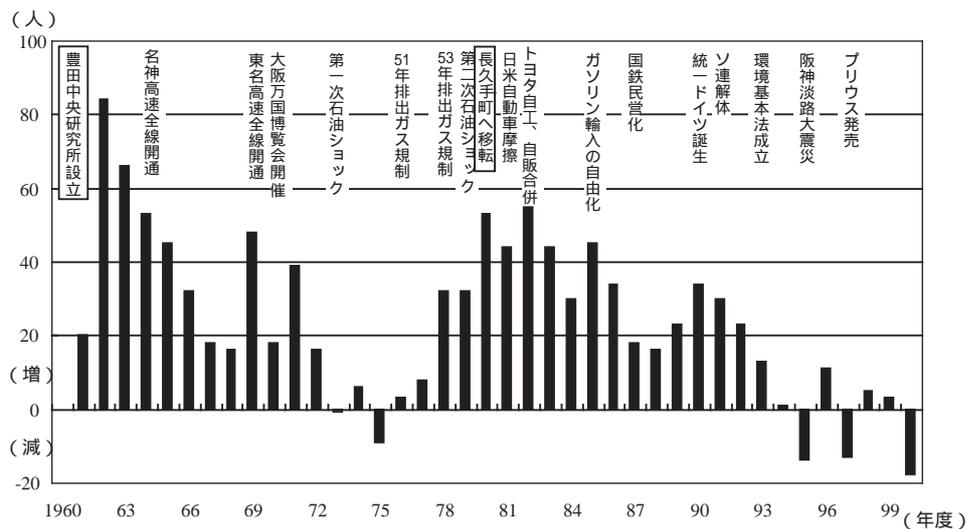


図1 年度始め(4月1日)における社員数の増減(当年度 - 前年度)